

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

## セ ン タ ー 通 信

第 9 号  
2015. 3. 25

## 毎日新聞連載「東京文学散歩」前後の

野田宇太郎

藤 井 淑 禎

野田宇太郎(明治四二―昭和五九年)と東京文学散歩については今でもまったく忘れ去られてしまったというわけではない。しかし、ある時期までは今とは比較にならないほど、この二つは世の中に広く知れ渡っていたようだ。野田自身の証言によれば、昭和二七年の初めからラジオ東京(現在のTBSラジオ―藤井注)で「東京文学散歩」の連続放送(一週三回三ヶ月間)を始めたところ、「東京文学散歩の時間が参りました」というアナウンサーの声と「通リゃんせ」のテーマミュージックとが評判となり、野田に対して「散歩屋さん」とか「文学巡礼者」といった(本人にとつてはあまり嬉しくない)呼び名がつけられたりし

たという(「あとがき」『新東京文学散歩』続編「角川文庫、昭和二八年五月」)。その種の例は、野田の編集で刊行された雑誌「文学散歩」(一―二五号、昭和三六―四一)のページを繰っていくといろいろ見つけることができるが、たとえば小田急バスを使つての文学散歩が始まつたのは昭和二八年であったという(榎信子「バスによる文学散歩」と共に「一一号」)。そして高度成長期に入りテレビの時代になると、テレビでも文学散歩の記録が連続放送されたようだし(二二号)、一二号の裏表紙には、「小林千登勢が文学散歩の著者野田宇太郎と共に、全国の文学のふるさとをめぐる楽しいテレビ教養映画の決定版!」と銘打つた「千

目次  
毎日新聞連載「東京文学散歩」前後の野田宇太郎  
杉田梅林をめぐるつて  
〈資料紹介〉  
「智的小説刊行会設立の理由」  
〈編集後記〉

登勢の文学散歩」のトキーフィルムの頒布広告が載っている。一回分が三分で、「木曾路(島崎藤村)」、「隅田川」、などといったまとめ方で、広告にある二、三〇本以外にも「以下続々制作中」とある。あるいはこれは、二一号でいうテレビの連続放送をフィルムに焼きなおしたものかもしれない。いずれにしても、こうした一種のブームとも言える現象が、ここで挙げた例に即して言えば、少なくとも昭和二七年前後から昭和三九年(二一号刊行の年)前後まで見られたわけだが、そうしたブームを生みだし、ブームの中心に居続けたのももちろん野田宇太郎その人であり、その著作である一連の東京文学散歩だった。一連の、と先走って言ってしまったが、ここでその一連の東京文学散歩の系譜を簡単に整理しておこう。

野田の最初の東京文学散歩の試みは、昭和二六年の上半期に六回にわたって『日本読書新聞』に連載された「新東京文学散歩」であり、毎回紙面のほぼ一頁全部を使って、上野・本郷付近、大川端、早稲田・牛込、高輪・麻布・麹町、田端・向島、武蔵野の順に掲載された。しかし、それらは新聞への連載であったので「紙面の都合上やむなく割愛せねばならなかつた部分が多かつた」(「序」『新東京文学散歩』昭和二六年六月)ために、野田は連載と並行して「それとは別個に約四倍の書き下し原稿を同時に作成して」おり(増訂版「角川文庫、昭和二七年三月」、増訂版「角川文庫、昭和二七年三月」、増訂版「角川文庫、昭和二七年三月」)、連載分にそれらを加えてできあがつたのが、最初の単行本である『新東京文学散歩』(昭和二六年六月)だった。野田はこうしたユニークな試みを始めた理由として、『新東京文学散歩』の「序」では、「足で書く近代文学史」という表現を用いて、文学は、文字で表現されたものを通じてだけでなく、作家の人間性、その私生活、それらを取り巻く自然と環境、などを知つてこ

そ本当に理解できるのであり、そうであればほとんどすべての文学者の私生活の場であった「東京を知らずしては近代文学の真実に触れることは出来ない」とまで言い切っている。

しかし、そのいっぽうで野田には、それをするには「既に遅い」という痛切な思いもあったようだ。「明治以来の東京の甚だしい変転」、すなわち大震災と戦災とが東京を破壊し尽してしまっていたからである。ただ、野田は、だからこそ一種の東京発掘が必要なのだという方向へと考えを切り替えていく。その行為は「温故知新」という言葉で言い表され、戦後日本を席卷した「過去否定の風潮」に鋭く対置される。

「未来への道標も亦蔵されてゐる」というのである。「私が時既に遅しと知りながら尚この新東京文学散歩にかけた願ひは、実はこの過去の塚中に枯骨を拾ふかほりに宝玉を求むることであつた」。

このようにして最初の単行本『新東京文学散歩』はできあがったが、それと前後してある難問が野田を悩ますことになった。すなわち最初の単行本で積み残したり、解決できなかった疑問、そこでは扱わなかった地域をどうする

のかという問題であり、さらには、刻々と変化していく東京をどう取り込んでいけばよいのかという問題も当然ついてくるだろう。

これらの難問に対する最初の答えが、増訂版（『新東京文学散歩 増補訂正版』角川文庫、昭和二十七年三月）の刊行だった。文庫本という体裁は、低廉・簡素で携帯にも便利であり、一般読者に配慮する野田の希望にもかなうものだったが、肝腎の難問をめぐっては「増訂版覚え書」では次のように述べている。

然し（新聞では——藤井注）書き尽せないこと云ふことはこの本の初版に於ても云へることで、私は本が出来てからも次々に改訂や増補を続けぬわけにはいかなかった。この本が初版そのままではなくて殆ど各章に亘つて新しく筆を加へ、名実共に新しい増訂版となつたのもそのためである。

ただ、初版と増訂版とを比べてみると、野田が言うほどには大きな違いは見られない。これは十ヶ月足らずという刊行時期の差から見ても当然で、主には推敲レベルの違いとみてさしつかえない。そして肝腎の難問については、「記録としては更に正確に、又更に豊

富にする必要がある」、「この仕事の続編を今も尚調べつけ書きつづけてゐる」として、決してこれで打ち切りではないことを宣言している。

問題は、それをどのような形で発表するか、である。当初、野田は「増補」というかたちを考えていたようだ。増訂版の一年余りのちに出された続編（『新東京文学散歩 続編』角川文庫、昭和二十八年五月）の「あとがき」では次のように述べている。

前著「新東京文学散歩」以後に遂次書き下した新稿と前著の部分の補遺とを合せて一卷としたのが本書である。はじめ私はこの仕事の性質上続編と称するものを作らず、飽迄も改訂増補して版を改めてゆくつもりであつたが、前著が文庫本となつて意外に多くの読者を得ることになつたので、読者の便宜をはかつて一先づ続編を作ることにした。

当初の、新規の部分は増訂版に、という方針が外的条件（？）によつてなし崩しにされた経緯が告白されている。いっぽうで野田は資料や挿絵を挿入しづらい文庫本という体裁の不自由さにも触れて「決定版が出版される暁を待つて果すより他はない」とも述べ

ており、調査のほうも「まだまだ続いてゐる」が文庫本は二冊で打ち切りをしたいと言っていることも考え合わせると、増補改訂という当初の方針を破棄して、新著＝決定版志向に転じたとみてよさそうである。

しかし、この頃の野田は、この問題（増訂版で済ませるか新著を用意するか）が抱える厄介さを、まだ十分には自覚していなかったように見える。この問題がいかに厄介かは、かりに決定版を出したとしても、最初の単行本が抱え込んだ難問（＝積み残したり、解決できなかった疑問、そこでは扱わなかった地域、をどうするのか、さらには、刻々と変化していく東京をどう取り込むのか）は依然としてついてくるということ想像してみるだけでも明らかだろう。

この、増訂版か新著か、という観点から、ここまでの野田の一連の東京文学散歩を整理してみると、新聞連載を増補したのが『新東京文学散歩』（昭和二十六年六月）であり、さらにそれを増補したのが『新東京文学散歩 増補訂正版』（昭和二十七年三月）であった。つまりここまでは、「この仕事の性質上続編と称するものを作らず、飽迄も改訂増補して版を改めてゆくつもり」

〔あとがき〕『新東京文学散歩 続編〕という方針通りであったことになる。

迷いなり転機はその後に訪れた。すでに見たように、昭和二八年五月刊の『新東京文学散歩 続編〕は、増訂版ではなく、新著の体裁をとっていたからである。そんなふうを考えてみると、その「あとがき」中の「前著『新東京文学散歩』以後に逐次書き下した新稿と前著の部分的補遺とを合せて一巻としたのが本書である」という一文は、きわめて意味深長な内容を含んでいてと言わざるをえない。とり方によっては、新著を志向する部分と増補を志向する部分とに引き裂かれた結果、その両方を混在させたヌエのような新著ができあがった、と見ることも可能だからである。前述のように野田がそれらのことほどの程度自覚的であったのかは甚だ心許ないが、いずれにしても、このあと、野田は、新著志向のみちを選択し、「決定版」〔あとがき〕『新東京文学散歩 続編〕を指すことになる。

野田自身が「あとがき」で「決定版」という言葉を用いた東京文学散歩の刊行は五年後の昭和三十三年から始まった。東京文学散歩第一巻『隅田川』(小山書店、昭和三十三年七月)がそれであ

り、広告等によると当初は全六巻(隅田川、下町・上、下町・中、下町・下、山の手、武蔵野・葛飾)の予定であったようだが、結局、第二巻『下町(上)』築地・銀座・日本橋界限(昭和三十一年一〇月)、第三巻『下町(中)』神田・下谷上野・谷中・根岸(昭和三四年八月)の三冊のみの刊行に終わった。潔癖な人柄の野田は出版社とのいざこざも多かつたらしいから、そのせいでの中絶かもしれないが、いずれにしても「決定版」はあらためて雪華社から刊行されることとなった。

しかし、今度も、定本文学散歩全集第一巻『東京文学散歩 隅田川』(雪華社、昭和三五年一二月)、第二巻『東京文学散歩 下町 上』(昭和三七年五月)、第三巻『東京文学散歩 下町 下』(昭和三七年八月)、第四巻『東京文学散歩 山の手 上』(昭和四〇年八月)の四冊のみで刊行はまたしても中断された。しかも雪華社版は改めての出し直しなので、最初の三巻は小山書店版と同一内容(第三巻にわずかな増補がある)であり、新たに書かれたのは本郷・小石川を取り上げた第四巻のみ、という寥々たるありさまであった。

何度も挫折を繰り返す、こうした一

連の「決定版」騒動(?)の背後には、確かに出版トラブルもあったかもしれないが、その根本にあったのは、あの〈増訂版か新著か〉問題であったのではないだろうか。当初、野田は東京文学散歩を書き継いでいくに際して増訂版か新著かの二つの選択肢があると考えていたフシがあるが(前掲「あとがき」『新東京文学散歩 続編〕)、無限に増補し続けるなどということがありえない以上、前者の可能性は実質的には閉ざされていたも同然だった。そこから、後者の新著路線へと転換したのかもしれないが、ここでも、潔癖に前著との重複を避ければいびつなものができあがり、といって避けなければい

増補するのか新著を書くのか悩まされる(Ⅱ増訂版か新著か)問題)わけだが、新たな地域であればそうした心配はない。『改稿東京文学散歩』の構成は、〈増訂版か新著か〉問題をたぐみに回避したやり方として十分理にかなっていたのである。

このようにみえてみると、野田の一連の東京文学散歩のあゆみは、前の仕事に積み残したり、解決できなかった疑問、そこでは扱わなかった地域への考察をどのような形で発表するか、さらには、刻々と変化していく東京をどのように取り込んで発表するか、すなわちここでいう〈増訂版か新著か〉問題との格闘の軌跡であったと言ってもいいかもしれない。しかし、前述のように、結局野田はどちらの道も困難であるという事実と直面し、そこで選ばれたのが『改稿東京文学散歩』の回避策というわけだったのである。

\*

このあと、野田は、『改稿東京文学散歩』(山と溪谷社、昭和四六年一〇月)でもう一度「決定版」に挑戦することになるが、ここではかなりの部分が初めて取り上げる地域で占められていた。たとえばすでに取り上げたことのある本郷なりを対象とすれば、旧著を

前述のように、〈増訂版か新著か〉問題のターニングポイントは、『新東京文学散歩』(昭和二六年六月)『新東京文学散歩 増補訂正版』(昭和二十七年三月)と、『新東京文学散歩 続編』(昭和二八年五月)とのあいだの時期に、求めることができる。『新東京文

学散步「続編」の「あとがき」に「はじめ私はこの仕事の性質上続編と称するものを作らず、飽迄も改訂増補して版を改めてゆくつもりであつたが、原著が文庫本となつて意外に多くの読者を得ることになつたので、読者の便宜をはかつて一先づ続編を作ることにした」とあることから、それは明らかである。そしてちょうどこの時期(野田が「増訂版か新著か」問題に悩み、二つの進路のはざまに揺れ動いていた時期)に、本稿の主人公である毎日新聞連載「東京文学散歩」は発表された。

「東京文学散歩」は昭和二十七年六月八日から一月二三日にかけて土曜日曜を中心に一八回にわたつて『毎日新聞』紙上に連載された。小さなコラム形式であり、一回分は字数にしてわずか一二〇〇字前後に過ぎない。そしてこの連載を中心として編まれたのが、『アルバム 東京文学散歩』(創元社、昭和二十九年二月)であつた。ただし、こちらは全部で五三の章から成つており、取り上げた地域は連載分より三〇以上も増えている。また、昭和二十七年の初めからは散歩にカメラを携行したという野田が撮影した写真が、書名にふさわしく大量に載せられている。この「東京文学散歩」から『アルバム

東京文学散歩』へと続く流れは、ここまで見てきた一連の東京文学散歩の系譜を本流とすれば、傍流にあたるものだが、実はこの「東京文学散歩」は、『新東京文学散歩 増補訂正版』(昭和二十七年三月)でペンディングにされていく多くの疑問や謎をその後の調査によつて明らかにした重要な一編でもあつたのである。

紙幅も限られているので本格的な考察は別稿を期することとして、ここでは「東京文学散歩」が明らかにした新事実のなかから二つの例を紹介しておきたい。一つは、野田が生涯をかけて取り組んだパンの会の会合場所のひとつであつた瓢箪新道の三州屋の所在地であり、もう一つは、やはりパンの会の人々が遊興を尽くした永代橋西詰めの料亭都川が戦後復活した姿であつた。どちらも、『新東京文学散歩 増補訂正版』(昭和二十七年三月)では確認できなかつたものであり、それを「東京文学散歩」が明らかにしたのである。三州屋の所在地を尋ね当てた「東京文学散歩」の「瓢箪新道」の項は昭和二十七年一月二五日の掲載であり、最近復活した料亭都川を尋ね当ててパンの会時代からの名物女将に話を聞いた「永代橋付近」の掲載は七月五日であつた。

コラム形式の規模なのでどちらも簡単な紹介にとどまるが、野田はそれを二つとも大きくふくらませて『新東京文学散歩 続編』(昭和二十八年五月)に取り込んでいる(「続・瓢箪新道」『永代橋』)。同書は増訂版ではなく新著の部類に入るから、収録された二つの文章も前著の増補というスタイルではなく、発見部分を中心とした新稿であり、前者は三州屋についていろいろ教えてくれた書店の主人との、後者はまさに有名な名物女将とのやりとりを中心とした魅力的な読みものとなっている。

のちに野田はこの二つの文章を生かして、『東京文学散歩第二巻』『下町(上) 築地・銀座・日本橋界限』(昭和三三

年一〇月)中の「瓢箪新道と『パンの会』」と、同第一巻「隅田川」(昭和三年七月)中の「永代橋付近」とを書くが、集成的な面も持たせた増補訂正的なスタイルなのでやや精彩を欠いている。ともあれ、「東京文学散歩」が連載された昭和二十七年後半は、『新東京文学散歩 増補訂正版』で増訂版方式にひと区切りをつけて、前述の二例に見られるような魅力的な発見をどのようなかたちで東京文学散歩の系譜に取り込むべきかに野田が思いを凝らし始めた時期だったが、それは同時に前述のような(増訂版か新著か)問題のジレンマに野田が陥つていく始まりでもあつたのである。

藤井 淑禎(立教大学文学部教授)